町民に愛される場、町民の憩いの場を目指して

谷村　敏彦（たにむら　としひこ）
民安ダム「サクラの森づくり」の会　会長

谷村会長と民安ダム「サクラの森づくり」の会のメンバー

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しく－北海道」運動第６回コンクールで奨励賞を受賞した団体、『民安ダム「サクラの森づくり」の会』会長の谷村敏彦さんにお話を伺いました。

≪日本海と利尻富士が眺望できる民安ダム≫

天塩町は北海道北部の日本海沿岸の町で、道内２番目に長い北海道遺産「天塩川」の最下流部に位置しています。天塩川のもたらす恵まれた自然条件を活かし、酪農と漁業の１次産業を中心として発展し、特にシジミ貝は、身の大きさ、味など全国のシジミの中でも特別の評価を得ています。また、広大な大地には、酪農が栄え、人口の約３倍にあたる、１万５千頭の牛が飼育されています。

1998年、国営事業により農業用ダムとして築造された「民安ダム」の完成を記念して地元住民や自治体、関係者によりサクラの植樹が行われました。海岸から約４kmに位置する民安ダムは、日本海と利尻富士を一望できる素晴らしい景観を有しています。植樹に参加した有志の中から、ここにサクラを植樹して町民の憩いの場として「サクラの森」を造ることを目的に、翌年の1999年『民安ダム「サクラの森づくり」の会』が設立され活動がスタートしました。

2024年５月に開催された植樹会の様子

≪10,000本のサクラの植樹を目指し次世代へ引き継ぐ≫

会では、毎年５月にサクラの植樹を行い、今年で26回目となります。会員のほか関係機関や地元中学生が参加し、これまで延べ3,000本を超えるサクラを植えています。会の発足から２年後の2002年には、天塩中学校の１年生が総合学習の場として、毎年植樹に参加し24年が経ちます。当初参加した中学生も今では大人になり、さらにその子どもたちが植樹に参加するといった次世代への引継も進んでいます。

当初、気象条件が厳しい天塩町では、サクラの群生は難しいとされてきました。会では「日本桜の会」から助成された７～８年のエゾヤマザクラの苗木を、毎年、５月の開花時期に合わせて植樹しています。谷村会長は「苗木は、その場所の開花時期に合わせて植えることで、丈夫な木に育つんです」と言います。

会では、植樹以外にも下草刈りの作業など苗木の管理を行っていますが、最近では野生動物による食害が増えています。シカに樹皮を剝（は）がされたり、野ネズミ（エゾヤチネズミ）は土中に侵入し樹木の根や樹皮をかじります。会も樹脂製ネットの保護資材や暗渠（あんきょ）用パイプを巻き付けたり試行錯誤しながらサクラを大切に保管しています。谷村会長は、プライベートで訪れた旅先でも、桜の名所に足を運び剪定（せんてい）方法や防腐（ぼうふ）処理など研究に余念がありません。

最後に「高齢者の会員も多くなっています。当初、植樹した子どもたちが成長し大人になったので、活動を引き継ぎ「サクラの森」が天塩町のシンボルになれば良いと思います。そのために10,000本を目指して活動していきます」と谷村さんは語ってくれました。

※当協会ホームページ、開発調査総合研究所・調査研究報告書から「わが村は美しく－北海道」運動第１～９回受賞団体の活動概要をまとめた冊子をご覧ください。